仏塔のある風景

――雲南省徳宏州における宗教観光――

長谷　千代子

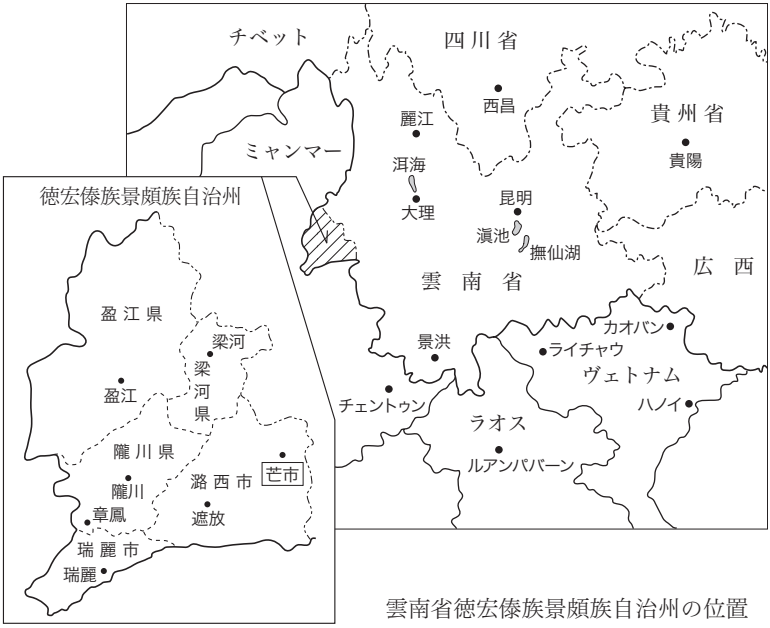
●●●●●

上座仏教の仏塔にスポットを当てながら、中国における宗教観光の特徴について明らかにしたい。

はじめに

徳宏傣族景頗族自治州は雲南省の西端に位置し、ミャンマー（ビルマ）・シャン州に隣接している。全体的に海抜八〇〇～二一〇〇メートル程度の起伏で山地と盆地が連なり、漢族のほかにタイ族やジンポー族などの少数民族が暮らす。この徳宏州において観光業が本格化したのは一九九〇年代からである。亜熱帯の自然や少数民族の文化や習俗が有力な観光資源と見なされ、今日までにさまざまなイベントや観光地が整備されてきた。そうした観光開発は、徳宏の景観や人々の暮らしに一定の変化をもたらしている。本稿では徳宏州の観光業を概観し、とくに観光地としての徳宏観光の特長を表現するキーワードとして、民族文化、生態文化、辺関文化、珠宝文化、抗戦文化の五つを挙げている［徳宏州史誌辦公室編 2009: 35］。まず「民族文化」とは、タイ族[1]・ジンポー族・アチャン族・ドアン族・リス族という徳宏の五つの少数民族の祭りや景勝地のことを指し、「生態文化」は大盈江、瑞麗江、芒市河などエーヤワディー川の支流とその周囲に広がる亜熱帯の盆地や山地の

一　徳宏州の観光業



雲南省徳宏傣族景頗族自治州の位置

風景を指す。この地勢と民族・文化構成は国境を越えてミャンマー側のシャン州へと連続していて、両国を分ける現在の国境は近代に入ってごく人工的に確定されたものにすぎない。そのため、一つの村の中に国境線が通っていたり、中国側住民の家の裏庭がミャンマーだったりすることがあり、これを「一寨両国」、「一院両国」などと呼んで、一種の観光スポットに仕立てたのが「辺関文化」の謂いである。また、シャン州から瑞麗にかけて産出される翡翠や玉を内地に運ぶ一大集積地ないし市場であることをアピールするのが「珠宝文化」、一九四〇年代前半に侵入した日本軍との激戦地や、戦士の墓地、記念碑などが、観光業における「抗戦文化」の内実である。

こうした特色――少数民族の文化、亜熱帯の自然、国境地帯ならではの現象や歴史――は、内地の中国人や外国人にとって一定の魅力を持つと考えられるが、徳宏州にとっての問題は、これが必ずしも徳宏州だけのセールスポイントではないことである。日本とほぼ同じ広さ（三九万四一〇〇平方キロメートル）の雲南省は、徳宏州も含めて一六の地域に区分されるが、その中には省政府所在地昆明、伝説の「シャングリラ」として観光地化を進める迪慶、世界遺産の麗江古城を擁する麗江、南詔王国の歴史で有名な大理、ミャンマー・ラオスと国境を接する西双版納などがあって、徳宏よりも多くの観光客をひきつけている。

表1　雲南省の主な地区における観光業状況（2008年）

地　区	観光業総収入（億元）	国内旅行者数（延べ：万人）	海外旅行者数（延べ：万人）
全省合計	663.00	10,250.08	250.21
昆　明	① 197.12	① 2,663.57	① 70.06
大　理	② 73.17	③ 921.64	④ 31.67
麗　江	③ 69.54	⑦ 578.91	③ 46.58
紅　河	④ 47.24	② 950.13	⑥ 10.00
迪　慶	⑤ 44.50	⑪ 374.47	② 51.99
西双版納	⑥ 41.17	⑥ 590.12	⑤ 11.31
徳　宏	⑦ 34.04	⑬ 354.94	⑦ 7.02

注：丸数字は省内の順位。
出所：『雲南省統計年鑑』2009年版、375頁より作成。

徳宏州の政府関係者や知識人が特に意識しているのは西双版納の動向である。西双版納はタイ族自治州としてタイ族の祭りや上座仏教風の風俗習慣などを積極的にアピールしており、全国的な知名度も高い。これに対して徳宏州は、同じくタイ族人口の多い自治州ではあるが、普段の服装や建築物などの点で漢化が進み、西双版納ほど異国情緒を感じさせないと考えられている。このため、タイ族文化を同じようにアピールしても、いつの間にか西双版納と間違えられ、客を西双版納にとられてしまうのだという。くわえて徳宏州はタイ族のみならずジンポー族の自治州でもあるので、タイ族だけを前面に押し出して宣伝するのは政治的に望ましくないとされる。近年ではむしろ、タイ族文化での勝負はある程度諦めて、徳宏州にしかいないジンポー族やドアン族の文化をアピールした方が、観光戦略としてまだ可能性があるのではないかという話も政府関係者の間から聞こえてくる。[2] また、生態文化の点でも、中国国内唯一の熱帯地域であるとアピールする西双版納に対して、徳宏は基本的には亜熱帯[3]とされており、どうしてもインパクトに欠けるというのが現地の観光業関係者の考えである。こうしたことから、徳宏州の観光業のより一層の発展という点について、現地の人々の間には手詰まり感が強い。

次に徳宏州の観光業の経年的な変化を見てみよう（表2）。徳宏州では一九八八年八月に州旅遊局が設立され、一九九〇年七月に州内の三つの県――潞西・瑞麗・畹町[4]――が外国人に開放されてから観光業が本格的に開始された。その後の統計資料によれば、徳宏州の観光業は順調に発展しているように見える。

しかし、現地の知識人たちは、こうした統計資料を鵜呑みにしてはならないという。そもそも観光客数を正確に数

表2　徳宏州を訪れた観光客の人数と経済収入

年	国内旅行者数（延べ：万人）	海外旅行者数（延べ：万人）	総収入（万元）
1992	29.044	0.626	1,449.07
1996	113.660	2.340	46,400.00
2000	179.250	3.983	91,327.29
2004	247.200	4.380	215,500.00
2008	354.940	7.030	340,395.17

注：海外旅行者数には香港・台湾・マカオからの旅行者も含む。総収入とは旅行者が当該地区で行った飲食、宿泊、交通、土産品購入などによるすべての支出のこと。
出所：『徳宏年鑑』1993、1997、2001、2005、2009年版より作成。

える手間暇をかけていないうえに、日常の生活圏が最初から両国にまたがっている「一寨両国」のような住人の人数を加算している可能性があるというのである。その真偽はおくとしても、筆者自身一九九六年から二〇一〇年までほぼ毎年徳宏州で調査してきた経験から、この数字のように一本調子の発展とは見なし難い事例もいくつか見ている。次節からはそうした具体事例に即して、徳宏州における観光の実情を見てみたい。

二　ガイドブックの中の観光地

そもそも徳宏州が観光地として重点的に宣伝しているのはどのような場所なのか。ここでは主に徳宏関係のガイドブックの項目から分析してみた。分析の仕方としては、まず筆者がこれまで収集した徳宏・雲南・中国そして雲南タイ族に関するガイドブック約四〇冊の中から、徳宏の観光地を（文中で触れるだけではなく）見出しに分けて一つ一つ紹介する形式のもの二五冊を選び、次いでその見出しになった回数の多い観光地を順に抽出した。[5] 表3はその結果である。

まず気付くのは、上座仏教所縁の場所が上位を占めていることである。徳宏には一五世紀までに主にミャンマー方面から上座仏教が伝えられ、タイ族のほかドアン族やアチャン族の間で広く受容されている。樹包塔、姐勒仏塔、允燕仏塔はいずれも上座仏教式のパゴダであり、菩提寺も地元のタイ語でゾン・シャン（宝石の寺）と呼ばれる上座仏教の寺院である。また、扎朶と大等喊については自然景観の美しさが強調されているが、扎朶には有名な仏足石の仏塔が、大等喊には上座仏教寺院があり、説明文の中で言及されることが多い。

次に注目されるのは、虎跳石と落水洞、扎朶、大等喊、三仙洞、瑞麗江など、自然景観の美しい場所が多く挙げられていることである。他にも、徳宏各地の温泉や、「独樹成林[6]」の記事も目立つ。これらは個々の場所としては数回ずつしか見出しになっていないが、「温泉」や「独樹成林」としてまとめると、それぞれ四二回と二五回取り上げられ

表3　ガイドブックの見出しで取り上げられた徳宏州の主な観光地

項　目	回数	宣伝ポイント
①樹包塔	16	仏塔と榕樹(ガジュマル)が一体化した奇観、省級文物保護単位
①姐勒仏塔	16	徳宏仏塔建築の冠、東南アジアで有名、国家重点保護文物だったが文化大革命で破壊され再建
③南甸土司署	15	歴史、建築様式、省級重点文物保護単位*
④允燕仏塔	14	1982年雲南省重点文物保護単位に指定、タイ族仏教建築の精品
④菩提寺	14	徳宏上座仏教の古刹、漢族式とタイ族式が混合した建築様式、省級文物保護単位
④虎跳石と落水洞	14	大盈江の絶景
⑦扎朶（地区）	13	扎朶景区、滝・仏塔・亜熱帯植物が一体化した景観
⑦大等喊（地区）	13	天然農村公園、水田・竹林・寺院が一体化した景観
⑨皇閣寺	12	上座仏教・大乗仏教・道教が併存
⑨三仙洞	12	仙人伝説、徳宏州名勝風景点
⑨畹町	12	国家級口岸の一つ、ミャンマーと一衣帯水
⑨瑞麗江	12	亜熱帯の自然景観、国家級風景名勝区
温泉	(42)	法帕、孔雀泉、戸宛、龍窟、芒蚌など
独樹成林	(25)	芒令、老刀弄、姐東崍、芒丙、三棵樹など
一某両国	(24)	一寨両国、一院両国など、国境地帯を強調したもの

注：丸数字は順位。
　　*1996年に国家級文物保護単位にも指定されている。

ていることになり、「仏塔」や「寺院」と並んで一つのジャンルを形成していると見なすことができる。

しかしながら、ここまでは特に目新しい話とは言えない。「少数民族文化」と「自然景観の美」は、徳宏州政府が有力な観光資源としてすでに公認しているものであり、上位の観光地にそれらの要素が色濃く見られるのは当然のことだからである。ただ、この二つの観光資源の関係性については公式的な文書の中には特に言及されておらず、考察の余地がある。現実にはこの二つの観光資源は必ずしも完全に分離・並立しているわけではなく、むしろ政府は両者をうまく組み合わせて観光地としての魅力を増幅させようとしている。そして、その組み合わせの仕方の中に、徳宏の人々、とりわけタイ族の暮らしと宗教と観光と政治の関係性が透けて見えるのである。次節では、この点について具体事例に即して考察を深めたい。

三　仏塔観光の現状

観光資源としての「少数民族文化」と「自然景観の美」の関係性を考えるうえで、恰好の材料となるのは仏塔である。タイ族の上座仏教にせよ、主に漢族の信仰を集める大乗仏教にせよ、一つの寺院が観光地として見出しで取り上げられるとき、その説明文では寺院の歴史と建築様式が解説されていることが多い。しかし仏塔の場合、それらとともにしばしば言及されるのは、周囲の自然と調和した風景の美しさである。また、扎朶や尖山のように、自然景観がメインだが仏塔と寺院も含まれるような観光地の場合、説明文の中で仏塔に特に言及するパターンが目立つ。つまり仏塔の方が寺院よりも周囲の自然景観と調和的なものとされる傾向にあるのである。

これは単に認識や先入観の問題というわけではなく、ある程度客観的な事実の反映でもある。地元の人々によれば、そもそも寺院は僧侶の修行場所、仏塔は仏舎利の供養場所という具合に、建てられる目的が本来異なるので、寺院と仏塔が必ず一セットでなければならないという決まりはない。それがしばしば一セットになっているように見えるのは、仏塔に付随する見張り小屋が寺院に発展することがあるためである。例えば尖山や扎朶の寺院は、仏塔に対して付随的な位置づけであるために、短い説明文の中では省かれやすくなるという可能性が考えられる。そして徳宏の有名な仏塔は、開けた盆地を流れる河の畔や小高い山の上のような、自然景観の美しい場所に建っていることが多い。そのことは、仏塔の由来や伝説に、野生動物や自然景観との結びつきを語るものが多いことからも、一定の関連性が見てとれる（表4）。

それでは、このように自然環境と上座仏教文化の調和の象徴になりやすい仏塔は、現在観光地としてどのような状況に置かれているのだろうか。以下、いくつかの具体例を見てみよう。

㈠　樹包塔

樹包塔は現在潞西市の小学校の敷地の中にある。『新編徳宏風物誌』によれば、清の乾隆年間の初めに、第十五代芒市安撫使である放作藩によって建立された。このころ潞西の町は多くの戦乱を経験したが、決して陥落することがなかったので、それを記念して塔が建てられた。この塔はタイ語でグアンムー・ジェレック（鉄の城の仏塔）と呼ばれるようになったという。その後この塔は一時荒廃したが、その間に榕樹の種が塔の割れ目に落ちて発芽したらしく、塔を包みながら成長して写真1に見るような奇観を呈するようになった。一九八〇年代後半から最近まで、ガイ

表４　徳宏州の主な仏塔の由来

仏　塔	由　　来
允燕仏塔	1949年、太平街の漢族と戦っていた盞達のタイ族土司が戦勝を祈願して小高い丘の上に仏塔を建立した。
風平仏塔	第15代芒市土司放作藩が高僧を招いて盆地の中心に仏塔を建てさせた。
姐勒仏塔	ある場所で夜中光るものがあるので調べてみると熊の骨が出てきた。釈迦の前世の骨であろうということになり、そこに仏塔を建てた。
洞上允仏塔	釈迦が孔雀に４回目に生まれ変わった時の舎利を収めて建てた。
弄安仏塔	ある沼地に一対の金の鴨がやってきて吉祥をもたらしたので、周囲に人家が増えて村になった。後世人々は金鴨を釈迦の前世と考え、その場所に塔を建てた。
景罕仏塔	ある人が景罕山で放牧していたら、ある場所で牛が跪いて草を食んだので、掘ってみると兎の骨が現れた。釈迦が前世に兎であったときの骨だということになり、そこに仏塔を建てた。

出所：張・方［1988］、張［1992］、呉主編［2001］など。

ドブックには一定して名前が挙がっており、しかもより早いページで紹介される傾向にある。省レベルのガイドブックでも徳宏州を代表する観光地として特に選ばれて掲載されている。

しかしこの仏塔は他の多くの仏塔と違って、地元の人々の仏教行事の対象ではない。例えば潞西では、雨安居[7]が開ける前日の夜、仏塔にたくさんの蝋燭の火をともして祈りをささげる習慣があるが、樹包塔では行われない。瑞麗方面ではポイ・サウサム（二十三日の祭り）といって、傣暦一〇月二三日に仏塔の周りで象脚鼓を打ち鳴らしながら踊

写真１　樹包塔（2010年９月筆者撮影）

る行事が盛んだが、樹包塔ではそれも行われない。以前は樹包塔でもポイをやっていたと語る人もいるが[8]、現在のタイ族の宗教的活動場所としては、すでに機能していないのである。

そしてそのことはガイドブックでの樹包塔の紹介文にも現れている。姐勒仏塔や允燕仏塔などについては、建立の由来となった伝説や現在も行われている宗教行事が紹介されているが、樹包塔については榕樹がいかに成長して仏塔を包んだかという形成過程と歴史の記述が中心である。そして時には「自然景観」というジャンルにおいて紹介されることもあるほど[9]、「人文景観」としての印象は弱められている。

もう一つ指摘しておかなければならないのは、この塔が観光地としても十分に機能していない可能性があることである。樹包塔は六〇年代に県級文物保護単位となったがその後十分な管理が行われず、一九八五年に修復された後、省級風景名勝点の一つとなっている。一九九六年一〇月に筆者が初めて参観した際、仏塔は張・方［1988］の巻頭のカラー写真で事前に見ていた素朴な様子とは打って変わって極彩色に塗られており、傍らには小屋が設けられて漢族の管理人が一人一元の入場料を徴収していた。二〇〇五年に出版された徳宏州の旅行ガイドブック『到徳宏撒野』では、入場料五元となっている［羅 2005: 223］。

しかし、二〇一〇年八月に久しぶりに樹包塔を訪れると、ショッピング街に面するように作られていた入口は閉ざされて鍵がかかっており、周囲の住人に小学校の入り口から入るように言われてやっと見られるような状態だった。また、管理人の小屋は取り払われ、入場料も徴収されなくなっていた。もともと地元の人々のあいだで、樹包塔の観光地化はあまり評判がよくなかった。樹包塔がいくら奇観であるといっても、高さ一二メートル弱の小さな仏塔であり、一般の観光客にとっては、見るのにそれほど時間がかかるものではない。また、小学校の敷地の中にあるため、周囲に娯楽施設などもない。写真で見てもある程度様子の分かる樹包塔だけを、小額とはいえわざわざお金を払ってでも見たいという人は、多くなかったのである。樹包塔は最近のガイドブックでもおなじみの観光地として紹介されているが、近くの菩提寺・五雲寺・観音寺などと一緒にまとめて散策コースの一部として紹介されるようになりつつある。

このように、樹包塔は、潞西を象徴する場所として一定の知名度を持つと考えられるが、単独では人とお金を集める観光地として成功しているとは言えない。また、上座仏教的な活動が行われていない点で、徳宏タイ族の文化を十分に代表しているとも言い難い。樹包塔はそのガイドブック内での存在感に比べて、影の薄い観光地となっている。

㈡　莫里

莫里は瑞麗の一地方を指し、近年では莫里自然景区という自然公園的なエリアとして整備されている。「莫里」はしばしば「扎朶」（ザックドー）という語で代替される[10]が、扎朶とは地元のタイ語で「仏足石」を意味する。この地方には釈迦が修行のために莫里を訪れ、去り際に仏足石を遺していったという伝説がある。そして実際莫里には仏足石を祀った扎朶仏塔（写真2）があり、その近くには滝と寺があり、いずれも扎朶廟、扎朶瀑布などと呼ばれて一つの景観区を形成している。

写真２　扎朶仏塔（2010年８月筆者撮影）

筆者が一九九八年に芒市を訪れたとき、タイ暦四月二三日（陽暦二月一九日）のポイ・サウサムに合わせて、芒市のタイ族の人々が百人近く扎朶仏塔を拝みに行くというので、同行させてもらったことがある。当時、彼らの話によると扎朶仏塔の中には仏足石があり、その近くには聖水の湧き出る泉があって、万病に効くという評判であった。実際彼らは目を輝かせて扎朶の素晴らしさを筆者に語り、共に行くよう熱心に誘ってくれたのだった。当時の扎朶仏塔は白を基調としたデザインで、その傍らには聖水とされる低温の温泉と、タイ王国やミャンマーの仏教徒から贈られたという比較的大きな仏像を祀った簡素な廟が建っていた。周りは森にかこまれていたが、塔と廟の近くは開けた草原になっていて、そこは多くの人出で混雑していた。徳宏州内の希少な仏足石の聖地として[11]、その名声はタイ族の間でゆるぎないものと思われた。

ところが二〇一〇年八月、改めて芒市とN村で扎朶の評判を確認してみたところ、人々の扎朶に対する関心は非常に低いものになっていた。彼らによると、観光開発のために扎朶は魅力を失ったというのである。

筆者が同月に扎朶を再訪したところ、この一帯は現在「扎朶熱帯雨林風景区」という自然公園になっていて、中に入るには五〇元の入場料が必要だった。仏塔は園内の駐

車場の近くに建っており、そのそばには聖水の泉もあった。しかし、周囲は熱帯植物園風に整備され、仏塔自身も金色に塗り替えられるなど、かなり人の手が加えられていた。そのそばにある莫里奘寺は、外観は上座仏教風だが、上座仏教の僧侶とともに大乗仏教の僧侶も二、三人止住していて、[12] ミャンマー製の釈迦像とタイ製の釈迦像と大乗仏教の観音像が並べて安置されていた。興味深いのは、これらの仏塔や寺院が必ずしも扎朶風景区の最重要スポットではないことである。この公園の最大の目玉は、そこからさらに一キロメートルほど山奥にある扎朶瀑布であり、観光ガイドもそこに至るまでに見られる珍しい熱帯・亜熱帯の植物や景色の解説に力点をおいている。ガイドブックの中でも、見出しになるのは「扎朶風景区」であって「扎朶仏塔」や「莫里奘寺」ではない。それらはいわば風景の添え物なのである。

扎朶の歴史的由来はあまり明らかではないが、少なくとも一九四九年には寺院が再建され、ジンポー族の僧侶が住持として招かれたとされている。一九六九年にはジンポー族の村がここに移転してきたとされる。その後、僧侶が亡くなって寺が荒れたので、一九八七年にミャンマー側の人々も含めて近隣の信者が募金をして仏塔の傍らに廟を建て直した。それから筆者が一九九六年に訪問したときまで、周辺住民の自発的な思いでこの仏塔が維持されていたと推測される。しかしまさにその一九九六年から、州政府は外部からの融資で扎朶の観光開発をはじめ、周辺の広大な地域の土地使用権を買い取ったので、住人は遮放地区への移住を余儀なくされた。彼らは今でもときどき仏教行事の際にこの公園にやってくるので、園側は入場料を割り引いたり、無料にしたりするという。しかし、気軽に寺院や仏塔を訪れて宗教活動することはもはやできなくなった。一〇年前、扎朶の祭りのためにわざわざ駆けつけていた芒市の人々も、入場料が必要になってからすっかり足が遠のいたという。[13]

このように、信者にとっては魅力が半減した扎朶だが、樹包塔とは違って、観光地としては一定の成果を上げているようである。観光ガイドの話では毎日平均二〇人程度の旅行グループが四〜五団体、莫里を訪れるという。また、街中で任意に拾ったタクシーの運転手は四人とも、瑞麗でもっとも人気の高い観光地として真っ先に莫里を挙げた。公園単体の収支は明らかでないうえに、園内のホテルが開店休業状態であることなど、すべてが順風満帆ではないようだが、少なくとも徳宏の亜熱帯の自然を見せる看板観光地としての役割は果たしていると言えそうである。

㈢　勐煥大金塔

勐煥大金塔は二〇〇七年に芒市郊外の雷崖山山頂に建立

された新しい仏塔である。中国では宗教施設を新たに建設することは原則として禁じられており、この仏塔もかつて存在していた仏塔を再建したものである。ただし、もとの仏塔はかなり小規模で、タイ族の古老たちも仏塔の由来を知らないほど忘れられかけていたものだった。しかも再建を主導したのはタイ族の人々ではなく、勐巴娜西珍奇園というテーマパークを経営する漢族の実業家だった。また、仏塔の外観はわざわざミャンマーから職人を招いて仕上げたためいかにも上座仏教的だが、内部には釈迦如来と共に薬師如来、観音菩薩、弥勒菩薩など大乗仏教の仏像も安置されており、上座仏教のみならず大乗仏教の要素も取り入れて、徳宏全体の宗教文化を表象することを意図して作られている（写真3）。

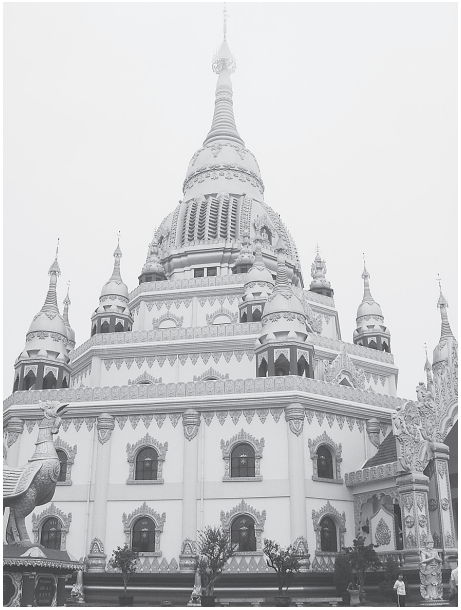


写真3　勐煥大金塔（2009年8月筆者撮影）

この仏塔が完成したあと、観光ガイドブックではこれを盛んに宣伝する傾向にある。省級や国家級の観光地として記載されている例はまだ少ないが、潞西県レベルのガイドブックは樹包塔よりも優先的にこの仏塔を新たな観光地として宣伝する傾向にある。[14] 特に強調して説明されるのはその外観と規模で、「中国国内最大の上座仏教式仏塔」「内部が空洞構造になっているアジア最大の仏塔」といった表現が目立つ。また、ここでも「自然景観」の要素は重要で、この仏塔の近くにある「孔雀湖」「勐巴娜西珍奇園」などがついでに紹介されている。「孔雀湖」は一九九九年まで「芒究水庫」と呼ばれていた人工の貯水池、「勐巴娜西珍奇園」は化石化した樹木片や奇岩の展示および植物園や動物園などからなるテーマパークである。また、仏塔の裏側に整備された石段は「抗日戦争記念碑」につながっており、山林を通り抜ける遊歩道になっている。

芒市のタイ族の人々が、この仏塔をどのように認識しているかという問題は、塔がまだできたばかりということもあって、もうしばらく慎重に見守る必要があるかもしれないが、筆者の見るところでは、タイ族にとってあまり特別な存在ではないと思われる。この仏塔が完成した当初は、

筆者の知る徳宏タイ族の反応は比較的好意的なものだった。彼らは普段、上座仏教寺院に大乗仏教的要素が混入したり、水かけ祭りが観光イベント化したりすることに対して批判的なのだが、「徳宏の発展のために巨大な上座仏教の仏塔を建立してくれた」といって珍奇園の社長を褒めていたことが印象に残っている。しかし今思えば、それはある種の部外者の仕事に対する軽い賛辞であって、タイ族自身の仏塔として受けとめていなかったせいではないかと思われる。現に珍奇園の社長によれば、タイ族からの寄付金は予想をはるかに下回り、「タイ族の人々は本当は上座仏教を信仰していないのではないか」という感想を抱いたほどだったという。[15] また、ここでも二〇元という入場料がハードルになっていて、私が二〇一〇年八月の滞在中に話を聞けた約三〇名の芒市およびN村のタイ族の中には、建立当初の祭典の時以来仏塔に足を踏み入れたことのある人はいなかった。筆者が彼らに、「勐煥大金塔でどんな仏教行事が行われているか見に行きたい」というと、その答えは大抵「何も行われていないよ。あそこは観光地だから」というものだった。[16] 実際「仏日」に塔に行ってみると、近くの村からいわば出向してきた[17]二人の僧侶が数人の観光客に赤い糸のお守りを授けているだけだった。僧侶たちの話によれば、人出が多いのは水かけ祭りなどのイベントのときだけで、それ以外は農暦一日と一五日に少し人が増えるとのことだった。この行動パターンはいわゆる大乗仏教を信仰する漢族のものである。また、タクシー運転手たちの話では、この仏塔はその周囲の道路や遊歩道がジョギングコースとして利用されているのであって、仏塔そのものに入る人はあまり多くないとのことだった。

勐煥大金塔はスリランカから西双版納経由で聖なる菩提樹の苗木を移植し、聖遺物を埋納する儀式をし、「宗教活動場所」として登録するなど、あくまで宗教施設として建立されている。しかし、珍奇園の社長や彼を間接的に経済支援した州政府は明らかに観光地としての利用を意図しており、一部から「宗教施設で金儲けをしていいのか」という批判の声も出ている。とはいえ、観光業の発展という目標の前にそうした原則論はかすみがちであり、なにより地元のタイ族にとってはそうした論争自体、縁遠いものにすぎない。[18]

四　分析

先に述べたとおり、徳宏州の主な観光資源は「少数民族文化」および「自然景観の美」であると政府は認識している。特に「少数民族文化」は、二〇〇〇年の「中国西部大開発雲南行動計画」で「民族文化大省」を目指すと表明した雲南省にとって、文化的にも観光産業的にも重要であ

る。ただし、徳宏タイ族の場合、「少数民族文化」がかなりの部分上座仏教という「宗教」と重なっている。ここから、「宗教」の観光資源化という現象が起こり、勐煥大金塔のケースに見られるような、「宗教で金儲けをしていいのか」という問題が生じる。現在の政府ないし共産党は、基本的に経済成長を第一に考えているので、宗教の観光資源化には比較的積極的である。旅遊局はあらゆる少数民族文化の観光資源化の可能性を探っており、他地域の観光ブームなども素早く取り入れる傾向にある。とはいえ、観光客のなかから盲目的に宗教を信仰したり、迷信に惑わされたりする人が現れるのは、共産主義思想の観点からして望ましくない。そのため主に宗教局などがそれに苦言を呈す役回りとなるが、よほど重大な問題が起こらないかぎり、そうした声はあまり大きくならない。

ここでまず確認しておきたいのは、「宗教」の観光化は政府や観光業関係者の主導で行われており、必ずしも徳宏タイ族の人々自身の発案ではないことである。地元のタイ族は観光化に積極的に反対するわけではないが、どちらかといえば煩わしいと感じているように見える。例えば、樹包塔で五元の入場料を徴収していたのと同じころ、上座仏教の古刹である菩提寺でも一元の入場料を徴収することが試みられたが、数年で取りやめになった。日常的に寺に寄進をしたり、社交の場として出入りしたりしている地元の人にとっていちいち入場料を取られるのは納得できない。しかし観光客だけから徴収し、常連からは徴収しない、というふうに区別するのも実際には面倒なことで、観光客と見なされた人から苦情を言われることもある。そのためこの試みは長続きしなかったのである。また、寺院が「文物保護単位」などに指定されると、改築の際に原状を維持せねばならず、自由に増築したり、建築様式を変えたりすることが難しくなって、地元の人々が不満を感じるということも起きている。[19] つまり、「宗教」の核心的部分については、中国共産党としても観光を通して宣伝するのはあまり望ましくないばかりか、熱心にその「宗教」を実践している地元の人々にとっても、あまり観光資源化されたくないものなのである。

かくして、現地のタイ族の宗教実践とは乖離する形で、観光化の過程において「宗教文化」が見出されるようになる。「宗教文化」は、具体的には寺院の建築様式やイベント化した宗教行事などの総称としてとらえることができ、一九九〇年代から観光業との関連で盛んに論じられるようになった。徳宏においては、二〇〇五年に勐巴娜西珍奇園がホームページ上で「仏文化」（宗教文化）を観光資源として重視する姿勢を見せたのが、筆者の知る限り、最初であった。[20] この「宗教文化」という概念のポイントは、一見「宗教」を前面に押し出しているように見えながら、実際

には宗教の教義的な核心部分をはずし、宗教色を脱色した周縁的な文化を暗に想定している点である。「宗教」を観光資源化しようとすると、地元の人々の宗教感情からしても共産党の政治方針からしても問題が多いので、建築様式やイベントなど、教義に触れずにすむ部分を観光資源化して、「宗教文化」と総称したと考えられるのである。[21]

「自然景観の美」は、いわばこのように脱色された「宗教文化」を再び彩るための便利な要素である。周りの自然環境に溶け込んだ建築物の美しさならば、いくら詳述しても賛美しても、政治問題化する危険はない。しかも自然や環境は今流行りのテーマであり、国内外共に関心が高い。[22]こうした文脈の中で、かつてはほとんど迷信と同一視されていたいわゆる精霊信仰や原始宗教も、自然と共生してきた少数民族の智慧の一種としてガイドブックにも肯定的に取り上げられるようになってきた。仏塔のある風景は、宗教の観光地化という難しい問題を回避しながら、自然の美しさに宗教的神秘性を加味して、少数民族文化と生態文化を同時に印象付けることのできる観光スポットであると言えよう。

おわりに

この徳宏州の宗教観光を全国的な傾向のなかでどのように見ることができるだろうか。残念ながら筆者はそれを十分に論じる材料を持ち合わせていない。しかし、ごく簡単だがその糸口の一つとして、観光に関する論文件数を中国の「知網」で概観してみたい。知網とは、中国国家教育部が主管し、清華大学が運営している学術文献データベースサービス（ＣＮＫＩ）で、中国全土で刊行されている主な学術雑誌の一九九四年以降の掲載論文をほぼ網羅的に検索・ダウンロードできる仕組みである。この中国学術期刊網絡出版総庫のＣＮＫＩ捜索を使って、各論文の主題部分に「観光（旅游）」「自然」「宗教」などのキーワードで検索をかけ、ヒットした論文数を一覧表にしたのが表５である。検索日は二〇一〇年一一月一二日で、複数語検索を利用したが、左側の単語ほど優先されるので、単語の順番を入れ替えると異なる結果が出る。したがって第一欄は「観光」に関する議論の中で重視されている話題の順番、第二欄は「宗教観光」に関する議論の中で重視されている話題の順番、第三欄は「自然観光」に関する議論の中で重視されている話題の順番を示すことになる。

まず第一欄を見ると、「旅游」との関連度が高いのは「発展」「経済」「資源」など、経済関連の語であることが分かる。以下は「文化」「自然」「歴史」など、観光資源として予想しやすいワードが並ぶが、このなかで「宗教」は最下位である。農業観光は世界的なアグロツーリズムの流行

表５　CNKIにおける「旅游」「宗教」「自然」などに関する学術論文数

第一欄		第二欄		第三欄	
検索ワード	論文件数	検索ワード	論文件数	検索ワード	論文件数
旅游	147,469	宗教	75,405	自然	634,095
旅游＋発展	65,838	旅游＋宗教	1,396	旅游＋自然	14,690
旅游＋経済	41,262	旅游＋宗教＋文化	989	旅游＋自然＋発展	8,050
旅游＋資源	39,782	旅游＋宗教＋発展	825	旅游＋自然＋資源	7,627
旅游＋文化	28,163	旅游＋宗教＋資源	587	旅游＋自然＋文化	4,927
旅游＋自然	14,690	旅游＋宗教＋歴史	487	旅游＋自然＋経済	4,736
旅游＋歴史	13,122	旅游＋宗教＋経済	419	旅游＋自然＋歴史	2,811
旅游＋民族	7,115	旅游＋宗教＋自然	393	旅游＋自然＋民族	1,472
旅游＋農業	6,643	旅游＋宗教＋民族	324	旅游＋自然＋農業	1,050
旅游＋度暇	3,473	旅游＋宗教＋民俗	253	旅游＋自然＋度暇	742
旅游＋民俗	2,997	旅游＋宗教＋度暇	55	旅游＋自然＋民俗	687
旅游＋宗教	1,396	旅游＋宗教＋農業	52	旅游＋自然＋宗教	337

注：それぞれのキーワードは筆者が重要と考えたものを任意で挙げているので、実際にはここに挙げたものよりも高い関連度を示す単語が存在する可能性はある。

を受けて近年中国でもようやく議論され始めたものだが、「宗教」はそれよりも注目度が低い。宗教観光が迷信復興をもたらすのではないかという危惧を表明する論文も多く、少なくとも中国では「宗教」と「観光」が本来結びつきにくい面を持っていることが分かる。

宗教観光に関する論文群（第二欄）についてまず注目されるのは、経済関連の語と同等かそれ以上に「文化」や「歴史」が重視されていることである。第三欄の自然観光に関する論文群では経済関連の語のほうがやはり優位なので、ここでも宗教と経済発展とを直接結びつけにくい傾向があることが分かる。勐煥大金塔の建設過程で見られた宗教と金儲けの問題は、徳宏州のみならず全国的に共通の課題と言えそうである。

徳宏州のケースと全国的傾向の違いに示唆を与えてくれそうなのは、「民族」と「民俗」というキーワードである。中国では、人々の生活文化を指すとき、多数派を占める漢族については「民俗」を使うが、少数民族については「民族文化」と使い分ける傾向がある。「風情」という語と組み合わせるときも、少数民族については「民族風情」であり、漢族については「民俗風情」となる。この使い分けはい

つも常に絶対に守られるというものではないが、この前提で考えることが許されるならば、第三欄において自然観光が「民俗」よりも「民族」との親和性のほうが高い結果になっていることは注目に値する。なぜなら、徳宏タイ族の知識人たちが普段よくこぼすのは、「漢族は、少数民族には大した文化や歴史がないと思っているから、少数民族を自然と結び付け、暗に野蛮と見なしている」ということだからである。

ただし、近年の「自然」は「野蛮」と関連付けられるよりも、「環境保護」という（ポストかハイパーかは知らないが）よりモダンなイメージを喚起するようになっている。しかも、そこに「宗教」を加えれば、自然に人文的要素を入れることができる。第二欄の「宗教観光」の文脈では、「民俗」と「民族」のあいだにあまり差がないことも、そう解釈すれば理解しやすい。また、「自然観光」の論文群は「宗教」への関心が低いが、「宗教観光」の論文群では「自然」が重視されている。「宗教」の観光化のために「自然」が必要とされていると考えることができるかもしれない。

「宗教観光」の展開が中国における「少数民族」「宗教」「自然」などのイメージを変容させるのか、それとも結局「自然とともに暮らす少数民族」という旧来の語りを強化するだけなのか、今後を見守っていきたい。

注

〈1〉 本稿で主に取り上げる「タイ族」は、中国で「傣族」と呼ばれていて、その中でも特に徳宏州に住んでいる人々を指す。タイ王国やラオスなどに住むいわゆる広義のタイ系民族に含まれるが、特にミャンマー・シャン州でシャン族と呼ばれる人々との親縁性が高い。なお、徳宏州の二〇〇八年の人口構成は『徳宏年鑑』二〇〇九年版、五〇頁によれば全州総人口一一八・五〇万人、そのうち漢族六一・九四万人、タイ族三五・四四万人、ジンポー族一三・六万人、リス族三・〇七万人、アチャン族三・〇四万人、ドアン族一・四一万人。ちなみに徳宏州の総面積は一万一五二六平方キロメートル。

〈2〉 実際、ドアン族文化を紹介する三台山のドアン族博物館や、ジンポー族の広山民族文化村などが、二〇一〇年までに相次いで整備されている。

〈3〉 中国では一般に西双版納が唯一の熱帯ということになっているが、徳宏は州内の那邦盆地や莫里を熱帯気候としている［徳宏傣族景頗族自治州志編纂委員会編 1994: 110］。

〈4〉 州内には他に盈江県、隴川県、梁河県があり、順次開放された。畹町は一九九九年から瑞麗に編入された。

〈5〉 抽出された項目総数は五八一である。「扎朶」と「莫里」のように表記が違っても同一地域を指す場合は同じ項目として数えた。また、一冊の中で紹介される順番、説明

文の中で触れられる特定の要素、よく使われるキャッチフレーズ、関連して挙げられる観光地などもチェックした。

〈6〉 巨大な榕樹のこと。独特な根の張り方をするため、一本だけで何本もの木が生えているように見えるものがある。

〈7〉 夏安居ともいい、地中の虫などの活動が活発になる雨季の三か月間、無用の殺生をせずに済むように僧侶が寺院にこもり、外出を慎む習慣。

〈8〉 一九九八年に六〇歳だった地元のタイ族の女性は昔なんらかの祭りをしていたと語り、一九九六年に四〇歳だった地元のタイ族の男性は、自分の父親の代には樹包塔でポイ・サウサムをしたらしいと語っているが、その他多くの人々は「知らない」と答えている。筆者は土司の関係者が私的に参拝する仏塔だったのではないかと推測する。

〈9〉 例えば張・楊編著［1993］、陳［2000］、王・張［2004］など。

〈10〉 瑞麗を主たるフィールドとして研究している小島敬裕によれば、「ザックドー」の原語は仏足石を意味するビルマ語の「セッドー」である。

〈11〉 この他に少なくとも一か所に仏足石が、もう一か所に釈迦の影が写ったとされる岩があるが、主にタイ族の人々にしか知られておらず、観光地としても未開発である。

〈12〉 現地の人々や研究者の話から考えて、少なくとも上座仏教の僧侶は本物ではない可能性が高い。

〈13〉 この経緯は、張［1992: 244］、徳宏州人民政府編［1998: 265］、年鑑編集部編［1997: 145］のほか、公園の従業員や芒市のタイ族への二〇一〇年八月のインタビューに基づいて再構成した。

〈14〉 雲南省レベルのガイドブックとしては、『雲南民族村鎮旅游』［2009］で徳宏州の「最重要景点」として勐煥大金塔が紹介されている。このほか、二〇〇八年から二〇〇九年にかけて出版された潞西県のガイドブック三冊がすべて、勐煥大金塔を一番最初に紹介している。

〈15〉 タイ族の人々は自分の村の寺のためなら、不平を言いながらでも数十元から時には数百元にものぼる寄進をするが、珍奇園の社長の計算によれば、勐煥大金塔への寄進は一人当たり一〜五元程度だった。

〈16〉 仏日は雨安居の期間中、七日に一度信者が五戒を授かり寺院に寝泊まりする行事。布薩日。

〈17〉 僧侶たちは近くの村から三日に一度三人ずつ交代で勐煥大金塔に来ていた。

〈18〉 勐煥大金塔をめぐる建設の経緯などについては、別稿に書く予定である。

〈19〉 この事例については、別稿に書く予定である。

〈20〉 観光資源としての「宗教文化」を論じたものとしては、李［1990］、楊［1995］、朱［1996］、林［2003］など。「仏文化」に言及した珍奇園のページは http://www.dh169.net/pubnews/doc/read/dhfg/438325506.1326659255/index.asp だが、現在は削除されている。

〈21〉 「宗教文化」の生成については、Nagatani［2010］も参

照のこと。

〈22〉 国家宗教事務局が刊行する雑誌『中国宗教』でも、田［2001］が仏教と環境保護の組み合わせを新鮮で発展的テーマとして紹介している。

参考文献

〈中国語〉

陳江　2000　『德宏　旅遊指南』雲南人民出版社。

陳茂雲主編、德宏州人民政府編　1998　『德宏州少数民族語地名誌』德宏民族出版社。

德宏傣族景頗族自治州志編纂委員会編　1994　『德宏州誌総合巻』德宏民族出版社。

德宏州史誌辦公室編　2009　『德宏年鑑』德宏民族出版社。

李剛　1990　「宗教文化――重要的旅游資源」『天府新論』一：三三―三六頁。

林勁松　2003　「〝入世〟与宗教文化資源的利用和管理」『中国宗教』二〇〇三年第一一期（総四八期）：三一頁。

羅寧　2005　『到德宏去撒野』雲南人民出版社。

年鑑編集部編　1997　『德宏年鑑』德宏民族出版社。

王鋒・張曉琴　2004　『傣族』中国水利水電出版社。

田悦陽　2001　「仏教与環保――讓人耳目一新的話題」『中国宗教』二〇〇一年第六期（総三一期）：一八―一九頁。

呉高儀主編　2001　『德宏傣族景頗族自治州　文化芸術志』德宏州文化局・德宏州民族芸術研究所。

楊文棋　1995　「略論宗教文化与旅游業的関係」『華僑大学学報』哲社版、四：七六―八〇頁。

楊旭恒・汪榕主編　2009　『雲南民族村鎮旅游』雲南美術出版社。

張承源・方華　1988　『德宏風采』雲南人民出版社。

張方元主編　2000　『新編德宏風物志』雲南風物志叢書、雲南人民出版社。

張建章　1992　『德宏宗教』德宏民族出版社。

張建章・楊雲吉編著　1993　『有一箇美麗的地方――德宏旅遊指南』德宏民族出版社。

鄭淼淼　2009　『雲南統計年鑑』中国統計出版社。

朱義禄　1996　「宗教文化与旅游資源」『旅游科学』三：三三―三七頁。

〈英語〉

Nagatani Chiyoko 2010 “The Appearance of ‘Religious Culture’: From the Viewpoint of Tourism and Everyday Life in Dehong, Yunnan,” Min Han, Nelson Graburn ed., *Tourism and Glocalization: Perspectives on East Asian Societies*, Senri Ethnological Studies 76.